

「あなたにとって数学とは何ですか」。ある女子中学生からこんな質問を受けた。最近の中学校では、自由研究として興味ある分野の著者を訪ね直接インタビューをするという課題を与えることがあるようだ。私も過去に何度かインタビューを受けている。

「こういう質問には「数学は私のすべてです。人生そのものです」などと答えれば、そのままになるのかもしれない。テレビや雑誌で歌手やスポーツ選手がそう答えるのを見たことがある。しかしさ自分が質問を受けてみると、少し違う気がした。

私にとって数学とは何だろうか。繰り返し自問するうちに、数学に集中している時が最も充実感を得られることに改めて気付いた。没頭していると2時間の通勤電車もあっという間だ。その感覚は小説を読みみ分けるときの勢いに似ている。だが突き詰めて考えてみると、両者には決定的に違う何かがあるように思えた。

小説には著者の意図や作爲が含まれるから、筋書きに論理的な欠陥や読者が納得いか

真理追究 人間の本能

数学は神様の小説

ない結末もあり得る。数学は違う。解けない時は百パーセント自分が悪い。数百年越しの未解決問題も、我々人類が至らないから未解決なのであり、数学の側に欠陥はない。

数学はいわば神様の書いた完璧な小説だ。完璧だからこそ読者はあらゆる邪念を捨て集中できる。私にとって数学は人生そのものではないが、全身を投じて取り組める相手だ。そして、そんな相手と出会える幸せはめったにない。

これは数学に限らず、すべての理工学研究に共通するのではないか。研究を始める動機には、社会からの要請もある。しかし必要に迫られて後追いで実施するよりも、誰も想定できなかった恩恵をもたらすことが研究の醍醐味だ。その方がむしろ人類の発展につながる。それを生み出す源は真理に引かれる人間の本能なのだ。

我々研究者は、純粋な探究心で真実を嗅ぎ分ける努力を怠ってはならない。女子中学生の質問はそんなことを思い起こさせてくれた。